



3. デジタルデバイスを用いた 小児診療の実際

太田 智和 ともこどもクリニック

デジタル聴診デバイス 「ネクステート」を早々に 診療に使い始めた理由

筆者の診療のコミュニケーションの基本軸として、「難解な専門用語をできるかぎり抜いた、より単純明解なもの」を常日頃より心がけている。言葉のみでは、説明する・される側の双方での解釈の食い違いが生じやすいと考えているからである。一方で、映像や音の感覚的な情報を共有した状態で説明が行われると、そのようなズレが生じにくいと考えている。

このような状況は、決して“医療者-患者”間に限定されたものではないと思われる。例えば、医学生・研修医の場合においても、同じようなことが起きうる。大学で6年間かけて医学の基礎と臨床を学び、さらに、“ポリクリ”と呼ばれる臨床実習も行われるのだが、なかなか診療技術に関する感性そのものを学ぶ機会が少ないために、医学生から研修医になった時に、感覚的な技術でいざ臨床診断をしようとなると難しいのではないかと考えられる。

小児診療においては、これはある意味で、あふれんばかりのネット情報に困惑する保護者の状況と類似している。インターネットの十分すぎる普及により、質の善し悪しを問わず、整理不可能な量のさまざまな情報が飛び交ってしまっている。つまり、「医学情報が散乱」

している状況であると言える。正しい医学的情報が広がること自体に異論はないが、正しい解説が伴わない場合、間違っただけ・偏った自己解釈になってしまう可能性がある。そこに経験十分な人物が介入して、感覚的なことを含めて学んでいけると、大変有意義な知恵を得て良い経験を積むことにつながる。この違いはかなり大きい。

医学生や研修医の場合には、臨床経験を積んだ医師に教えてもらう機会があるのだが、外来診療における患者および保護者への説明は、従来行われてきたやり方では伝わりきらない部分が多いのではないかと考える。どのような咽頭が“のどが赤い”のか、どのような胸の音が“ゼーゼー”なのかなど、いずれも人の感覚を通して得る情報であるために、客観性に欠ける。その中でも、聴診器での音の違いの感覚を学ぶ機会は少ないと思われる。そういった理由から、本稿で紹介するデジタル聴診デバイス「ネクステート」（シェアメディカル社製：図1）を含めた診察の工夫によって、リアルタイムに患者、患者家族、加えて看護師との感覚的な情報を共有することは、大変有意義であると考えられる。

さらに、医師の座りっぱなしの姿勢から生じる健康面での問題点の改善についても、ネクステートを含めた個人的工夫例として紹介していきたい。

また、医療のすべてをデジタル化したらよいのではなく、結論としてアナログの医療のためにデジタル化を行う意義を

提唱したい。

先人医師いわく、「机の上の教科書ではなく、実の患者から学ぶことが大切」とある。“実の患者”の正しい医療水準が上昇すれば、自ずとわれわれ医療者の水準も変化し、より良い医療のスタイルが築き上げられることが期待できると考える。

新型コロナウイルス感染症 流行下におけるネクステートの 小児科での実用性

— 患児と保護者の反応を含めて

“生体音”をネクステートを用いて、患児と保護者にも聞いてもらった反応



図1 デジタル聴診デバイス ネクステート